保育士の保育観形成過程についての一考察
－ TEM 図の分析を通じて －

浅 井　かおり ・ 浅 井　拓久也

One consideration about the formation process of the outlook on childcare in the childcare person

Kaori Asai and Takuya Asai

要旨

本研究は保育観について着目し、現在の保育観に至るまでのプロセスを明らかにすることを目的とした。保育所では保育理念や保育方針を念頭に置きながら、各保育士の保育観を元に保育が展開されている。その保育観は、保育士自身の性格や育ってきた環境、経験などで異なるものであり、新たに経験を重ね、自身の学びによっても変化していくものである。現在の保育観に至るまでに個人がどのような道筋を辿ってきたのかを明らかにすることにより、保育者養成校の教授への資料としたい。現役の保育士に半構造化インタビューを実施し、TEM 図を元に分岐点や共通点を検討した。その結果、幼稚園の頃の良い思い出があり、自らの決断で保育者養成学校進学や保育所へ勤務する、その後、保育所の正規職員になり担任を任されることにより責任を感じた過程を辿る。その責任感こそが現在の保育観を変えたことが明らかになった。

キーワード

保育観、形成、プロセス、TEM

1. 研究の背景と目的

保育所保育指針（2008）では、「保育所全体の保育の質の向上を図るために、職員一人一人が、保育実践や研究などを通じて保育の専門性などを高めるとともに、保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協働性を高めていくこと」と示されている。また秋田他（2011）は、「保育の質の重要性が国際的に周知されてきている一方で、質の定義は文化に依存したものであること、またその質を具体的に評価するために構造の質と過程の質についてどのような内容に注目し、それらをいかに分節化してとらえることが可能であるのか、具体的にどのような尺度や指標によって質を捉えようとされてきているのかを整理」している。

このような保育の質には、保育者がどのような計画を立てどのように子ども達と接しているか等、保育の計画性や保育内容、また、何を大切に保育しているかという保育観等が影響している。

そして保育所での保育は、保育理念や保育方針を念頭に置きながら、各保育士の保育観を元に展開されている。その保育観は、保育士自身の性格や育っ

てきた環境、経験などで異なるものであり、新たに経験を重ね、自身の学びによっても変化していくものである。

これまで保育職における社会的な期待の高まりなどから、保育観の研究が多く行われてきた。

保育観に関する先行研究を概観すると、藤木他（2011）は、認定こども園に移行した園の保育者の保育観がそれ以前と比べてどのように変化したかを検討し、保育経験にかかわらず、より子ども中心、過程重視、個性尊重に変化したことを明らかにした。佐藤（2011）は、保育者養成校で学ぶ学生のもつ保育観が取得資格によって異なることを明らかにした。また田中他（2013）は、保育所の保育者と保護者の保育観についての意識を比較し、多くの保護者が高い意識を持っている一方で多くの側面で意識の違いがあることを明らかにした。その違いには、保育サービスを提供するうえで好意的に捉えられることができるものと、違いを改善する必要があると考えられるものがあったと述べている。

そこで本研究は、保育士個人が生きてきた道筋を辿り、現在の保育観に至るまでの経路を分析し、共通点や分岐点を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

（1）対象者

調査対象者は、都内の保育所に勤務する保育士3名に協力を依頼した。荒川他（2012）は、「4 ± 1程度のインタビューを行うと、等至点に至る経路に生じる多様性を描くことが可能になる」と述べていることから、本研究では3名に設定をした。また、各保育士の保育歴は、A保育士約5か月、B保育士約5年、C保育士約15年である。選定の理由は、異なる保育年数や保育経験を持った保育士の語りを分析し、現在の保育観に至るまでのプロセスを検討することが多様性を描くことにつながると考えたためである。

（2）データの収集方法

研究の目的を説明し同意を得た後、3名の保育士に1名ずつ半構造化インタビューを実施した。

（3）分析の方法

現在の保育観に至るまでの個人が生きていた道筋を丁寧に辿るためには、実際に選択をしてきたことや決断をしてきたこと、また歩んできた道など、出来事を細かく把握することが必要である。また、選択はしなかったが起こりえた出来事を捉え、分析をする材料とすることも、研究を進めるうえで重要である。そのため本研究では、個人の生きてきた時間の流れを詳細に捉えることに効果的な複数経路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model : TEM）を用いるこことした。

安田他（2012）は、「複数経路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model : TEM）の特徴は、人間を開放システムとして捉えるシステム論（von Bertalanffy, 1968/1973）に依拠する点、時間を捨象して外在的に扱うことをせず、個人に経験された時間の流れを重視する点の2点にある。」また、「TEMは個人のライフ（生命、生活、人生）に関するテーマについて、その人の生きてきた時間を重視しながら考えて確認する方法」と述べている。さらに上田（2014）は、TEMを活用し分析を行うことを「TEMである個人が外界と相互交渉しながら（社会的ガイダンス、社会的方向付け）、選択し（分岐点）、多様な経路を辿りつつ（複線経路）、何らかの最終状態（等至点）へと至るプロセスを明示することができる」と述べている。堺他（2013）も、保育者の専門性を読み解く方法としてTEMを活用している。

（4）分析の手順

本研究では、まず保育士にインタビュー調査を実施し、そこで語られた内容を文字化した。次に、1人ずつ出来事を抽出し時系列に並べた。それを3名分行ない、3名が同じような経験をした出来事を同じ列に揃えた。その後、現在の保育観を安田他（2012）の基本概念に従い、「『等至点（Equifinality

Point：EFP）』、『必須通過点（Obligatory Passage Point：OPP）』、『分岐点（Bifurcation Point：BFP）』、『社会的ガイド（Social Guidance：SG）』、『社会的方向づけ（Social Direction：SD）』」とし、ポイントとなる箇所を見出だした。等至点は現在の保育観とし、多くの人が経験するような出来事を必須通過点、等至点に進む選択や行動を分岐点とした。また他者から反対を受けた出来事を社会的ガイド、他者から受けた好意的な助言を社会的方向付けとした。さらに本研究では、特に分岐点の中でも3名が共通していた出来事を共通の分岐点として表現した。その後、実際に辿った事象をつなぐ線と実際には辿らなかったがその可能性があった事象を点線でつなぎ、図1の通りに分類をした。幼稚園入学から中学校卒業までを第1期、中学校卒業以降から保育者を目指そうと決意するまでを第2期、そして保育所の正規職員になってから現在の保育観までを第3期としてTEM図を作成した。

3. 結果と考察

第1期「幼稚園入学から中学校卒業までのプロセス」

保育士3名とも偶然にも幼稚園に通っていた。就学前に集団生活の場を経験することは多くの人が通過する出来事であろうことから、幼稚園入学を「必須通過点」と整理した。それぞれの幼稚園の頃の思い出は良い思い出であり、先生が優しかった、親とは良い関係性だったと幼いながらに感じた思いを記憶をたどり語っていた。3名が幼稚園の思い出は良い思い出として記憶に留めていたため、これを「共通の分岐点」として整理した。このように、先生が優しかったと記憶する背景には、先生が自分に共感し寄り添ってくれた経験などがあったからこそ、自己肯定感が育まれ、良い思い出として記憶に残っているのだろうと考える。その後、小学校から中学校まで義務校育を受け、その間に家の近所の子どもやいとこの子どもと遊ぶ経験をする。これも核家族化が進む現代であっても経験することが多い出来事であろうと考え、「必須通過点」と整理した。

その後、3名は違った道筋を描く。A保育士は中学3年時の進路選択で保育科のある高校に進みたいと親に相談するが反対される（社会的方向づけ）。

第2期「中学校卒業以降から保育者を目指そうと決意するまでのプロセス」

A保育士は中学卒業後、親の反対を受け、保育科ではない高校に進学するが、保育科に通う友達から保育実習に行き、子ども達が可愛かったという話を聴く（社会的ガイド）。そのことがきっかけとなり、保育科の大学に進学をしようと決意する。B保育士は高校時に自らの意志で保育所にボランティアに行くものの、高校の進路選択時には保育科に進むという決断はせず、大学の経済学部へ進学をする。しかしその後の就職活動時に、好きなことを仕事にしたいと考え、自分の好きなこととは子ども達と関わる仕事だと思い、保育を仕事にすることを決意した。そしてC保育士は、中学卒業後就職をするが、嫌なことがあり退職をする。その後、次は何をしようかと考えている際に知り合いから保育士を勧められ（社会的ガイド）、保育所で働こうと決意した。この3名の決意を共通の分岐点とした。その時期の保育観は、笑顔で楽しく子どもと関わりたい、ただただ子どもとたくさん遊びたい、楽しい時間を過ごしたいというものであった。

第3期「現在の保育観に至るまでのプロセス」

3名それぞれが保育士資格を取得し、保育所で正規職員として勤務しながら保育をするようになる。その際3名とも正規職員としての責任、担任としての責任を感じながら子ども達とかかわるようになる。（共通の分岐点）。この責任感こそが現在の保育観を変化させた。A保育士は今まではアルバイトなどで休みたかったら休むのように責任感が無かったと語る。しかし、0歳児クラスの担任となり命を預かる保育士の重要性を感じ、責任感を感じるようになった。B保育士はパート職員から正規職員となり、担任を任されるようになったことで責任感を持つようになった。そしてC保育士も朝と夕方のみ勤務するパート職員から、1日子ども達とかかわる担任

や保育士をまとめる主任を任されたことで責任感を持つようになった。

4. 総合考察

本研究は、個人が生きてきた道筋を辿り、現在の保育観に至るまでの経路を分析することを目的とした。その結果、現在の保育観に至るまでの共通の分岐点として、幼稚園の頃の良い思い出があり、自らが決断し保育者養成学校進学や保育所に勤務し、その後、保育所の正規職員になり担任や主任を任されることにより責任を感じ、その責任感こそが現在の保育観を変えたことが明らかになった。正規職員になったことへの責任や担任として子ども達とかかわることの責任感が、とりあえず子どもと楽しみたい、ただただ子どもとたくさん遊びたい、という自己欲求を満たす要素が強かった保育観から、子ども達の命を守る、子どもの気持ちに寄り添いくみ取る、保護者支援を心掛けたい、子ども達のキラキラと目を輝かせる一瞬を見逃さない、保育者同士のコミュニケーションも大切にする等、命の重みや子どもたちの最善の利益を保障するような保育観へと変化したことが明らかになった。

本研究は保育所の保育士にインタビューを実施したが、幼稚園や認定こども園など形態の異なる園に勤務する保育士や元保育士をしていた方のような保育現場を一度離れた方々の保育観の形成プロセスは、人生の経路がそれぞれ異なるため、辿る道筋も異なるであろう。その違いを検討することが今後の課題である。

【引用参考文献】

秋田喜代美・佐川早季子（2011）、「保育の質に関する縦断研究の展望」、『東京大学大学院教育学研究紀要』、第 51 巻、p231

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）、「複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」、『立命館人間科学研究』、第 25 巻、p99

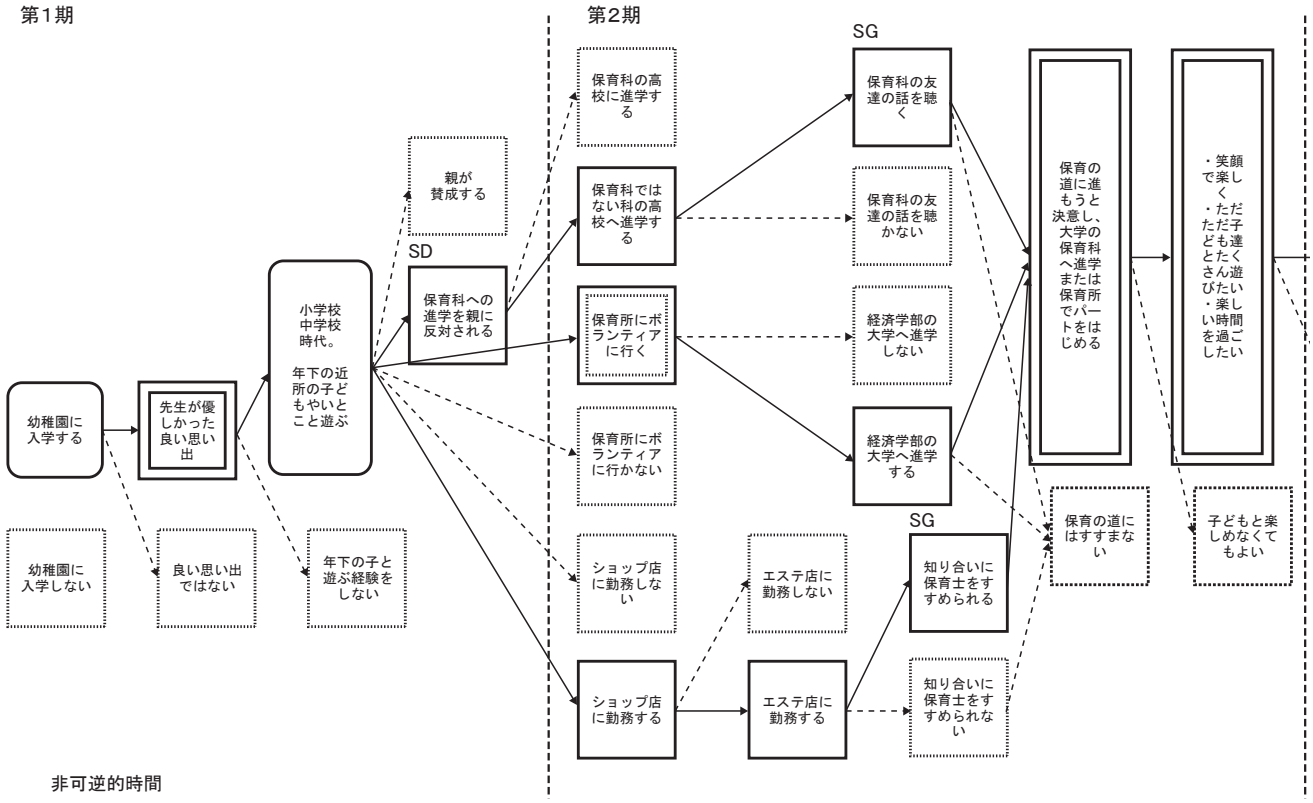


図 1

厚生労働省（2008）、「保育所保育指針」、『フレーベル館』

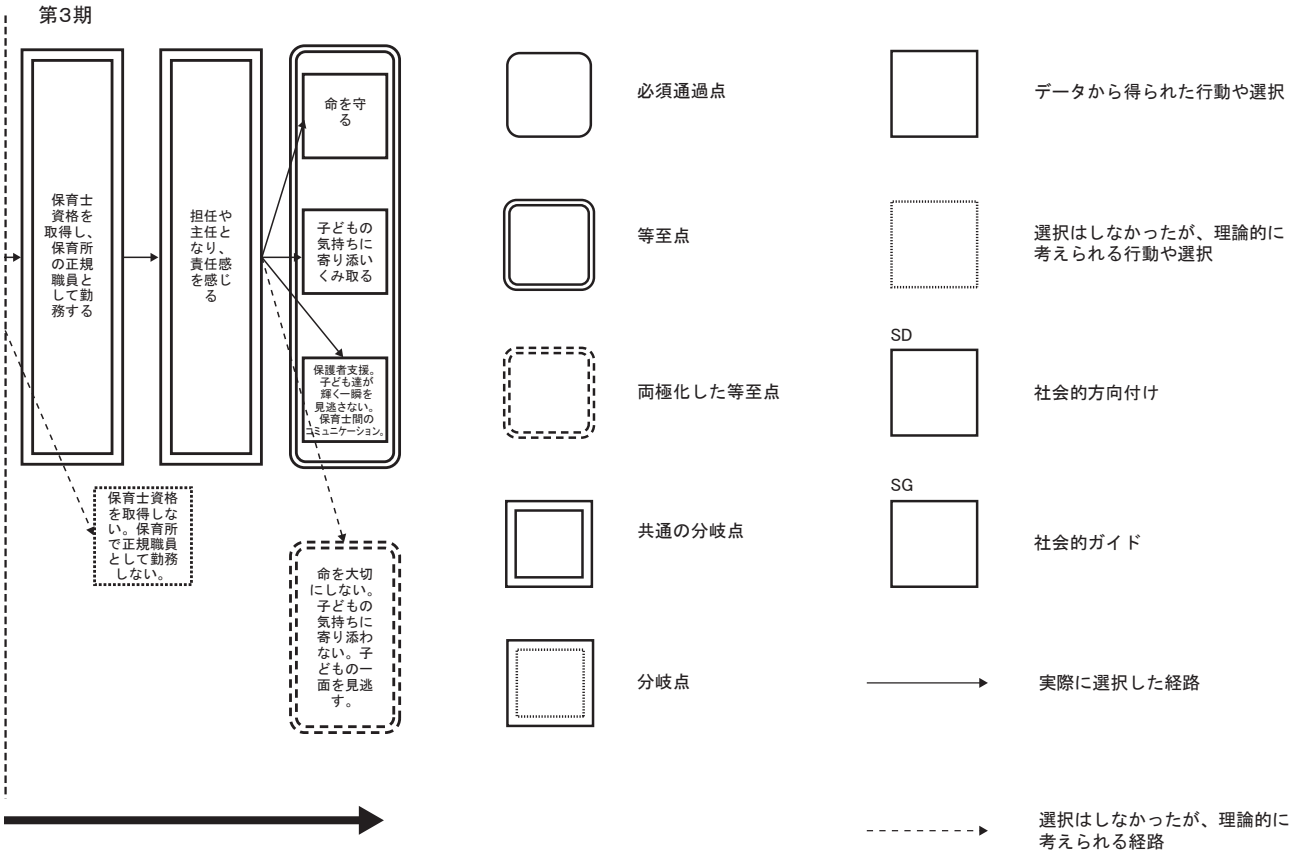
木内美恵子・島田英昭（2012）、「教員養成課程における臨床経験科目が教職志望意識に与える影響－半構造化面接と時系列的分析による検討－」、『信州大学教育学部付属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』、第 13 巻、pp.31 -40.

堺愛一郎・中坪史典・保木井啓史・濱名潔（2013）、「保育実践研究のツールとしての複線経路・等至性モデル（TEM）－可能性と課題を探る－『広島大学大学院教育学研究科紀要』第 3 部、第 62 号、pp.161 -170.

田中浩二・大塚良一・福山多江子・田中利則・中川浩一・肥塚新一（2013）、「保育所の保育者と保護者の保育観に関する意識の比較－保育所と保護者に対する意識調査の結果から－」、『東京成徳短期大学　紀要』、第 46 号、pp.11 -21.

藤木大介・上田七生・樟本千里・若林剛太・長尾史英・山崎晃（2011）、「認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響」、『梅光学院大学論集』、第 44 巻、pp.11 -21.

安田裕子・サトウタツヤ（2012）、「TEM でわかる人生の経路　質的研究の新展開」、『誠信書房』、p2. p4

（あさい　かおり）東京未来大学

（あさい　たくや）埼玉東萌短期大学